

長与善郎研究

「竹沢先生と云ふ人」を中心に――

熊本和仁

「竹沢先生と云ふ人」という作品への私自身の取り組み方は、竹沢先生の世界観をとらえる方向に求めた。このことについては、作者がその序で「自分の宗教観・世界観を述べようとした」という意味のことをいっていること、また長与氏は思想性の強い作家として認められている点から妥当であると考ええる。

その前に長与氏の思想性ということに関連させる意味で、白樺派の文学思想面を支えている主な作家をみることにする。

第一には白樺派のリーダー格としての武者小路実篤があげられる。彼の主張は白樺派内において大いに影響を及ぼし、又彼の主張がそのまま白樺派全体の主張となっている点で非常に重要である。個性のそれぞれ異なる作家にあつて、その共通の基盤であり文学的信条となつている、個性を伸ばすこと、自己を生かすことが価値のあることであり、善なる

ことであつて、それは人類の意志に通ずるといふ考え方は、武者小路の考え方が全面的に白樺派作家に受け入れられたものといえる。志賀直哉については、傑出した作品を書くという面ではその代表者にちがいないが、思索の作家でない故をもつて除外する。ほかに思想面で取りあげていゝ作家として有島武郎があるが、本多秋五氏は自著「『白樺』派の文学」の中で、「有島武郎という存在そのものが『白樺』派に対するもつとも本質的な批評であつた。」と述べているように、有島武郎は他の白樺派の作家がなし得なかつた社会主義思想とか階級の問題を持ち込んだ唯一の例外人であつて、白樺派の文学を特色づける文学思想の外に立つていゝ理由で彼も除外する。

以上によつて、白樺派の文学思想は武者小路によつて一応代表され、またその中に思想

系統の作家として長与善郎も含まれることになる。

「竹沢先生と云ふ人」の作品では著者の世界観が述べられている。勿論その世界観をそのまま白樺派の考え方の現われとしてみることはできないが、断片的にしる氏自身の白樺派らしい思想の主張となつていゝところがある、そういう点から比較して長与氏の思想的主張が武者小路に代表される白樺派の思想と同じであるかどうかみたい。白樺派の思想といつても長与氏自身の粹と解釈があるからである。

白樺派の文学は反自然主義を標榜した文学であることは自明のことであり、自然主義の文学は結果的には暗い感じのものとなり、また無理想の文学であつたのに反し、白樺派の文学は意欲的に明るい面をとらえようとし、そこに率直な明るさがあり、理想主義の文学である。その白樺派の明るく率直的な面は、「百人のうち九十九人が悪人であっても一人の善人がもしそこにいゝなら、人生は讀むべきかな」といふ底抜けの楽道家である武者小路に代表されるが、長与氏の場合はその楽観度ほどの程度のものかを見ていく。

次いで白樺派の文学では「社会」が抜き取られていゝことについて、「竹沢先生

と云ふ人」の中で考察し、さらに一般に言及していくことにする。また、長与氏がこの作品を完成させた時、氏にとってどのような意義を持つものか触れることにする。

以上述べてきたことは長与氏の「竹沢先生と云ふ人」を研究していく際の課題となる。

次には、この作品にあらわされた世界観をとらえていく順序になる。この世界観というのは始めから完成された結果のものではなく、竹沢先生の精神的成長とともに未熟なものから完成の域へと移行しているものである。

竹沢先生の世界観形成の途上で、重大な働きをするものに、自然対人間を問題にした自然観がある。そこにみられる考えは、自然と人間との関係は産み出したものと産み出されたものの関係であり、産み出したものである親は産み出されたものである子を本能的な自己愛としてかわいがるものであるとする見方である。そして人間が自然に対して、幻滅や裏切られた感じを持つ場合は、人間は自然の親の無数の子の中の一人であり、自然とは次から次へと子をこしらえてゆくのに忙しい精力絶倫の親であるということをつい忘れて、人間は自然の『唯一人の秘蔵っ子』と自惚れ

た結果であるといっている。

ここにみられる自然観は、自然と人間とは戦い合うもの、対立するものとはみていなく、元来調和の関係にある、それは絶対的な調和というものではないけれども、ともかく調和を認めていることがいえる。

次に世界観形成への一段階として創造主義を考えた時期がある。この創造主義は一度は世界を構成する原理を安易に肯定しない懷疑主義を考えるけれどもそこに安住し得ず、そこから直ぐ積極的な創造主義の場へと抜け出しているところに大きな特色がある。この懷疑主義の場から創造主義の場への転換については、「世界と人類との成立がよし無意味・無目的な唯物的原理に過ぎないとしたところ

でそれだからと云って何も吾々が一緒に物質になりきり、自ら目的を律し、意義を創造してならぬと云ふ理由は成り立たない」筑摩書房版現代日本文学全集第28長与善郎 野上弥生子集(頁)と述べて「自ら画を書こうとする画家は何も書いてない白布をよるこぶ」などの例えを持ち出して、さらに次のように展開している。「大抵人生とは創造主義の処。建設の場。世界に神も意味もないとしたら、吾々自らが勝手に、安心立命が行くやうに自分でそ

れをでっち上げるべきである。吾々は自分で自分の神をでっち上げなければ結局不満足で、従って不幸であるやうに出来てゐる。…」(29頁)と結んでいる。

ここにみられる創造主義の考え方は、人間本位に神を創造するということで、本来の宇宙の構成原理・その意味(神の存在)は認めようとならない無神論の立場に立つ考え方である。

この段階の無神論的な立場は竹沢先生がその世界観を確立していく過渡的なもので、最終的には竹沢先生はその世界観において神の存在を認めてくるようになっていく。

その神とは狭く限定された人格的な勧善懲悪の神といったものではなく、「僕は唯法則としての神を——自然のうちに生きる法としての神を信ずる。孔子はその法則を『天』と曰ひ、老子は：。印度人は：と曰ひ、希臘人は『ロゴス』と曰った。」(30頁)と述べているような自然のうちに生きる法としての神である。そして「吾等はこの実在なる法則を強いて神と呼ぶ必要はない。本当に生き生きと体感さへするならばそれを『無』と呼んだって、『神』と云ふのと同じである。」と結んでいる。

その神についてはさらに形而上学的考察を深めて、「神は何はさておき己れ自らのために生存し、己れの一部として、子として人類その他の衆生を普ねく愛(有機的連帯)を持つてはゐるが、それはどこ迄も『自己愛の反映としての愛』、『自愛』の一部であつて、『

生類を愛するが為めに己れを愛するのでは無い』から、そこに生じ得る調和は、勿論『在る』事は確實であるが、生類の側から見れば、或る程度迄のもの、即ち『縁』のもの運命次第のものと云ふ事になる。』(『眞』)と述べ、竹沢先生の世界観は神を根底にしたものであることをいふ。次に、人間の望む正しい世界とは善因が必ず善果を産む、最早「縁」というものが存在しない世界であると言及し、さらに続けて、「かくて一種の深い『諦め』と云ふものを、——苟も生をこの世に享けたるものの『絶対』に必要』なる覚悟として——先生は夙にその人生観の根底においてゐた。」と結んでゐる。以上は竹沢先生の最終的に打ち建てた世界観であつて、まもなく竹沢先生がなくなつてゐる。

ここに打ちたてられた世界観は悲観主義の相当に入り込む余地を持つてゐる。勿論そこに楽観主義も同居してゐることは認められる

が、その影はうすいものとなつてゐる。けれどもこの世界観を形成する過程では、「人間は自然の威力に、自然は又人間の根氣と有能に、お互にあきれてゐる。親も子も両方偉大だ」とする楽観主義を強く出した時のあつたことを付け加えて置く。

次にその世界観を土台として打ちたてられた竹沢先生の人生観をみていくことにする。

竹沢先生の生き方を見る時、何かこせつかない大様さがある。又子供っぽい無邪気なところもある。大体において、楽観的な明るい生き方であるとは、竹沢先生の第一の弟子ともみなされる「自分」を通した見方である。これは「自分」の見解に留まらず、一般的に認められる事である。

けれども竹沢先生の生活では、使つてゐる女中が妊娠したなどという竹沢先生に取つては不幸な、これを始めとする事件が持ち上るが、結果的には先生にその不幸が及んでいない。また、藤村操が「巖頭の感」の句を残して投身自殺をしたことについて、竹沢先生は人生は理屈のみで生きる程狭いものではない

という考えでもつて退けてゐる。ほかに竹沢先生には「熱願冷諦」という信条がある。これは願つて可能であると思ふこととはことん

まで、執着し過ぎる程追求してゆくが、可能だとわかればさりと今までの行きがかりを捨て、諦めてしまふという主義である。

一般に竹沢先生の人生観は楽観主義のものであるといわれる。けれども竹沢先生が一連の不幸を避け得たのも、又熱願冷諦の主義に生きたのも人間には分があるという深いあきらめの覚悟ができていたからこそということができる。そこには悲観主義がある。

竹沢先生の人生観は楽観主義のものといつていいが、ただ楽観主義という単純なものではなく、楽観主義の根底には悲観主義があつた、あるいはその楽観主義というものは悲観主義を辿り抜けたものだとも表現できるものである。楽観主義の下に悲観主義があつたからこそ、竹沢先生の人生観というものが不動のものになり得たということが出来る。他の事については省略する。

(本学四年生)